輝く未来に夢を託して…定年退職される先生方

どう生きるかを世界につなごう

経済学部教授　内田　弘

本学に在職し34年間、たくさんの学生と勉強してきました。幸せでした。「将来形成」に参加することができたからです。

学生のみなさんは、私たち教職員より数十年先の将来まで生きてゆきます。その意味で、学生は

「将来そのもの」です。私たち教職員は、学生という「将来そのもの」を育てています。教育は将来形成活動なのです。これからどう生きてゆくか、将来選択という課題を、教育も、政治も担っています。

いま、日本も世界も大変な状態です。そういう時だからこそ、これから自分は何に向かって生きてゆくのか、その生き方は日本と世界にどのようにつながっているのかを考え、行動してほしいと思います。

そのために「計画・実行・反省」を沈着に繰り返してください。お元気で。

（在職34年。主な担当は「経済倫理学」）

未来と希望…二つの詩を贈る

経済学部教授　平尾　光司

「ストラスブール大学の歌」

教えるとは学ぶこと共に未来を語ること共に希望を語ることルイ・アラゴン詩集「フランスの起床ラッパ」

「生徒諸君に寄せる」

諸君はこの颯爽たる諸君の未来圏から吹いてくる　透明な清潔な風を感じないか

宮澤賢治詩集「春と修羅4」

専修大学に入職して学生諸君に対面したときに想い出されたのが、学生時代に親しんだこの二つの詩であった。

現代は希望を語るのが難しい時代であり、未来の不透明さと混迷も深まっている。しかし、このような現代だからこそナチス・ドイツ支配下のフランスで、未来と希望を語ったルイ・アラゴン、昭和初期の貧しい東北の農村からの宮澤賢治の、二つの詩を卒業生、在校生の皆さんに紹介して、贈る言葉といたします。

（在職7年。主な担当は「中堅企業論」）

ゼミ生170人　生涯の「財産」に

経営学部教授　奥田　勝臣

私は20年前、企業での経験を携えて専修大学に奉職しました。打てば響く専大生が大好きでした。とりわけゼミナールをこよなく愛し、ゼミ生とともに学び遊びそして悩みました。卒業していった170人のゼミ生は生涯の財産であり、これからも学び合いたいと願っています。

就職指導委員長として就職活動のお世話をし、学部長・理事として大学、経営学部の改革にも取り組みました。失敗もありましたが、少しは実績を残せたと思っています。皆さんに支えられて幸せな教員生活を送ることができ、心より感謝しています。

果たすべき役割　日々追い続ける

経営学部教授　岡田　和秀

豊かな時代になった今、われわれは経済的な欲望については、借金までして叶えようとする愚かさとは決別し、「足るを知る」べきである。そして、人類愛とでもいうべきそれ以外の希望・大望をもってほしい。

たとえば、地球上いたるところにあるさまざまな貧困の克服に向けて、自分が果たせる役割は何かを真摯に考え、その大志・大望を日常生活の傍らで「正夢」として追い続け、少しずつでも実現してほしい。

大きな変化が継起する21世紀で、夢を追うなか、折々の挫折に悲哀を味わい、その困難に躓し、それを克服し歓喜に浸る心豊かな人生を送ってほしい、と切に願う。

（在職26年。主な担当は「経営管理論」）

未来に希望が持て、正義が貫かれる世の中を取り戻すには、若い諸君が自分でよく考えて行動し、率先して選挙に参加する以外に術がないことを認識してください。

（在職20年。主な担当は「情報システム」）

ボーダーレスを生きる君たちへ

文学部教授　柘植　光彦

君たちは、10年前の同世代に比べて、はるかに広い世界に生きている。21世紀はWeb 2.0の社会だともいわれる。君たちにはおなじみの、2ちゃんねるもmixiもYouTubeもWikipediaも、21世紀の産物なのだ。

現実と非現実の境界も消えはじめている。就職して結婚して家族を作るというのもリアルだが、ネット空間で未知の相手とゲームをやるのもリアルだ。君たちはそういうボーダーレスな世界の中にいる新しい世代であり、新しい価値観、新しい人生観を創ることが要求されている世代だ。

ネット空間に埋没するのは現実からの逃避だ、などという意見は、まさに旧世代の発想だ。ネット空間をすでに生きている君たちは、どう反論する？

（在職35年。主な担当は「日本文学概論」）

法科大学院

文学部教授　佐々木孝次

在職16年。主な担当は「人間学概論」

教授　筧　康生

在職5年。主な担当は「民事法総合演習」

教授　谷口　安平

在職3年。主な担当は「倒産法」

学位取得

小沢一郎経営学部准教授＝写真＝が、1月20日付で慶應義塾大学から博士（商学）の学位を授与された。学位論文名は、「進化的イノベーションのダイナミクス」。

上海社会科学院経済研と交流協定

社会知性開発研究センター

社会知性開発研究センターは2月17日、上海社会科学院経済研究所（中国）と組織間協定方式による国際交流協定を結んだ。内容は▽共同研究▽研究員の交流▽講演会およびシンポジウムの開催。

社会知性開発研究センターの都市政策研究センター（04～08年度オープン・リサーチ・センター整備事業）と中小企業研究センター（同）は、5年前から同研究所と研究交流を行ってきたが、今回の正式協定により弾みがつく。

※上海社会科学院は1958年、上海市政府が設立。北京市政府設立の北京社会科学院と並ぶ中国を代表する研究機関。15研究所、19学際研究センターから構成され、研究員465人、大学院生500人を擁する。

大学と地域の連携―徳田経済学部教授が基調講演

大学連携推進フォーラム

3月1日、川崎市多摩市民館で開かれた「大学連携推進フォーラム」で、徳田賢二経済学部教授＝写真＝が「『民』学連携の新たなチャレンジ―シニアの力、ヤングの力、コミュニティの底力」と題し、基調講演を行った。

KSコミュニティ・ビジネス・アカデミーのアカデミー長を務める徳田教授は、「アカデミーでは、定年退職した団塊の世代や主婦の皆さんが培ってきた社会経験を地域コミュニティに還元するための知識と実践を大学院レベルで提供し、NPOなどコミュニティ活動への参画者や起業者、専門アドバイザーの育成を目標にしている」と全国でも先駆的な取組みを紹介した。さらに新百合ヶ丘や長沢商店会で地域の活性化に携わってきた自らのゼミナールの事例から、「豊富な人生経験をもつシニア世代と斬新なアイデア・パワーをもつヤング世代がコラボレーションすることで、コミュニティが活性化する。未来をつくる新戦力としての活動は、学生にとって大きな自信になっている」と話した。

「シニアの力」と「ヤングの力」コラボレーションを

訃報

佐藤　博氏（さとう・ひろし）名誉教授、元経済学部教授

2月8日、急性心筋梗塞で死去、82歳。告別式は同11日、厚木市のJAあつぎグリーンホールで執り行われた。喪主は妻れい子さん。経済学部長、学校法人専修大学理事・評議員などを歴任。1997年3月定年退職。

依願退職

【3月31日付】

岩淵　孝経済学部教授（在職26年）

フォトス　サンドラS経済学部教授（在職16年）

黒瀬　直宏商学部教授（在職9年）

島田　孝右商学部教授（在職23年）

伊藤不二洋商学部准教授（在職38年）

専修人の新しい本

起きあがりことば

心の筋肉に効いていきます

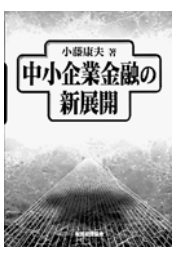
佐藤　雅幸著

心がくたくた…。そんなときに読んでほしい一流アスリートを支えてきたことば。転んだとき、落ち込んだとき、起きあがるための「ことば」を持っているだろうか？　著者の30年間におよぶ指導実績から生まれた「起きあがるためのことば」を323個収録。読むだけで、いつの間にか心が強くなってくる。「七転び八起き」のことわざ通り、弱った心を七章に分けて書いてある。気になる章を開いてみよう。一転び：「モヤモヤ」二転び：「グルグル」三転び：「キリキリ」四転び：「ヘトヘト」五転び：「アワアワ」七転び：「クヨクヨ」。アスリートだけでなく新社会人にもお薦めの1冊。（朝日出版社・本体1000円＋税）

著者＝（さとう・まさゆき）経済学部教授。担当はスポーツ科学論、スポーツ心理学。

中小企業金融の新展開

小藤　康夫著



中小企業金融は地域金融機関が担う分野であり、リレーションシップバンキングは地域金融機関が利用する金融手法であると考えられている。

だが、今日では中小企業に向けた投融資は大手銀行も積極的に展開しているうえ、高度な金融技術の発達からトランザクションバンキングも利用できる時代に入っている。

本書では、こうした視点から大手銀行にとっても中小企業金融は魅力的な領域に変わりつつあることを明らかにしている。

ユニークな試みとしてシステムダイナミックスのソフトを用いながら、因果関係を分かり易く示している点にある。これにより図を眺めるだけでも要点が理解できるであろう。（税務経理協会・本体2600円＋税）

著者（こふじ・やすお）＝商学部教授。担当は金融論。

1日3分　脱「日本人英語」レッスン

田邊祐司、T・ライト共著

自己紹介のとき私たちが真っ先に思い浮かべるのは〝My name is～〟という表現だろう。しかしこの表現が相手と距離を置く機能をもつことを知る人は少ない。

本書はこうした誰もが知っている英語表現を機能面から見直し、言葉の真の「運用知」を高めてくれる好著である。（朝日新聞出版・本体740円＋税）

共著者（たなべ・ゆうじ）＝文学部教授。担当は通訳入門ほか。